

■**平時忠(平関白)** 公卿。姉時子が平清盛の正室となって大出世, “平関白”の絶頂に至るも, 平氏滅亡で配流された。

たいらのときただ

・ ・ ・ ・ ・ 1127= 生。桓武平氏高棟流, 兵部権大輔時信の子。

鳥羽院政始・1129= 2歳:

・ ・ ・ ・ ・ 1136= **9歳**:

・ ・ ・ ・ ・ 1145=**18歳**: この頃, 姉の時子が平清盛の正室となったため, 平家一門でありながら堂上公家の出身であることを利して, 清盛と連携し, 平氏政権の確立に尽力して行く。

・ ・ ・ ・ ・ 1146=19歳: 非蔵人,
・ ・ ・ ・ ・ 1147=20歳: 蔵人, 大学助, 左兵衛尉, 左衛門尉に任じ,
・ ・ ・ ・ ・ 1148=21歳: 檢非違使の宣旨を受けた。
・ ・ ・ ・ ・ 1149=22歳: 従五位下に叙される。

為朝鎮西乱行1154=**27歳**: この頃, 清盛とともに鳥羽院の院司であったことが知られる。

保元の乱・ ・ 1156=29歳: 保元の乱によって清盛の勢威が高まったことは時忠の官途にも影響を及ぼし,

藤原基衡没・ ・ 1157=30歳: 兵部権大輔,

後白河院政始1158=31歳: 従五位上,

平治の乱・ ・ 1159=32歳: 続く平治の乱で加速され, 刑部大輔,

・ ・ ・ ・ ・ 1160=33歳: 右衛門権佐(檢非違使)・右少弁に至り,

・ ・ ・ ・ ・ 1161=34歳: 正五位下に昇叙されたが, 後白河院の後宮にあった姉妹の滋子(のちの建春門院)が皇子(のちの高倉天皇)を生むと, これを皇太子に立てようとはかって清盛の子教盛とともに解官され,

・ ・ ・ ・ ・ 1162=35歳: 源資賢らと二条天皇を呪詛したとして出雲に流された。この事件は二条天皇と後白河上皇の対立に根ざすものであり,

・ ・ ・ ・ ・ 1163=**36歳**:

三十三間堂・1165=38歳: 天皇の死後, 許されて召還。

源頼政内昇殿1166=39歳: *本位に復した。その後, 清盛の権勢の確立と建春門院が後白河院の寵愛を一身に集めるという状況が幸いして官途の昇進はめざましく, この年のうちに左少弁・右中弁・蔵人頭・従四位上に至り,

清盛太政大臣1167=40歳: 参議に列して右兵衛督を兼ね, 従三位,

巖島神社・ ・ 1168=41歳: 右衛門督に任じて檢非違使別当の宣旨を被り, 正三位権中納言に至った。

後白河院出家1169=42歳: 延暦寺衆徒強訴事件で, 院の近臣中納言藤原成親の罪状に不実を奏したと平信範とともに配流となるが,

・ ・ ・ ・ ・ 1170=43歳: 衆徒の要求によって, 召還され本位に復する。

・ ・ ・ ・ ・ 1172=**45歳**: 清盛の女徳子が高倉天皇のもとに入内すると中宮権大夫に補せられ,

・ ・ ・ ・ ・ 1174=47歳: *4人を超越して従二位となった。時忠が「平関白」と称され, 「平氏にあらざるば人非人なり」と高言したことはよく知られているが, まさにこのころが彼の得意時代といえる。

法然浄土宗始1175=48歳: 右衛門督となって再度檢非違使別当の宣旨を被り,

・ ・ ・ ・ ・ 1176=49歳: 別当を辞したが,

治承のケデータ 1179=52歳: 正二位に昇叙のち左衛門督に遷っていた時忠は*3たび檢非違使別当に任命された。使別当に3度も補せられることはきわめて異例のことで, 彼の権勢と清盛や院による抜擢を想起させるが, 平氏の権力確立の過程で, 時忠が使別当として京中の軍事・警察権を掌握していたことは看過しえない。この年, 彼は使別当の立場から強盗12人の手首を切断させているが, 当時の公卿のなかにあつてきわめて峻厳な態度といえよう。

源氏一斉蜂起1180=53歳: 高倉天皇の退位とともに院の別当となる。ちなみに時忠の妻洞院局は新帝安徳の乳母であった。

平清盛没・ ・ 1181=**54歳**:

・ ・ ・ ・ ・ 1182=55歳: 中納言に転じ,

後鳥羽天皇・1183=56歳: 権大納言に任じた。平家の都落ちに従ったが, 政府は安徳天皇と神器を取り戻すために時忠との交渉を策し, 平家一門の者を解官したとき, 時忠と内蔵頭信基・讃岐中将時実の父子3人は除外された。しかし, この工作は失敗して解官。

平氏滅亡・ ・ 1185=58歳: *壇ノ浦の合戦で生虜になったが, 堂上公家であるために鎌倉に送られることはなく, みずから神鏡の安全をはかったことを主張して罪の軽減を求め, 死1等を減ぜられて能登への遠流と決まった。しかし, 時忠は京都を容易に動こうとせず, 頼朝と不和となった義経に意識的に接近して, 義経を女婿にとり, 事を構えようとする動きをみせた。これに対して頼朝は, 梶原景季らを上落させ, 配流の沙汰を速やかに行うことを申し入れ, これによって即座に配流は実行に移され, 能登にあること3年半,

奥州藤原滅亡1189=62歳: 珠洲郡の配所に没した。